令和２年度 第１回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】令和２年９月 10 日（木）
午後１時 30 分～午後２時 45 分
【会場】大日本報徳社　大講堂

１　出席者

・　発言者　掛川市において様々な分野で活躍中の方
　４名（男性２名、女性２名）

２　発言意見

番号	分野	項　　目	頁
発言者１	農業	観光農園と農業振興	2
2	地域活動	ボランティアの取組	5
3	働き方改革	新しい働き方の実践と支援	7
4	文化	本の力と文学の必要性	12

【川勝知事】　皆様こんにちは。広聴会は、市町のリーダー格の方たちからお話を承り、県政に役立てる目的で行っています。平成21年から、毎年５～６回開催し、今回で70回近くになるのではないかと思います。今年度に入り、ＣＯＶＩＤ-19（新型コロナウイルス感染症）で、これまで開かれず、今回が初めてということでございます。

しかしながら、今日は素晴らしい大日本報徳社の大講堂をお借りすることができまして、緑したたる環境の中、素晴らしい環境の中で、皆様のお話を承ることができるのは大変ありがたいことです。

お聞きしたこと、あるいは何か要請があったことにつきましては、必ずお返事差し上げ、決められることはそこで決めるというふうに、これまでやってきました。おそらく要請よりもいろいろと学ぶことが多いのではないかと思いますけれども、必要とあれば議会で、あるいは県の様々な委員会でご提言いただきまして、人々の福祉を上げていくことにつなげていきたいと思っております。

世界の農業遺産になった茶草場農法は、掛川市の持っている場の力というものが、世界の人々、世界農業機構の方たちの心に訴えたと思っております。同時にそれは伝統の力であると思っております。それから、この掛川という所は、全体の佇まい、これが市民の心の形ではないかと思っております。また、市民力の高さというものがあるのではないかと思います。

私は掛川と長いご縁がございまして、今日、こうした形で、掛川市民の方たちのご意見を承るのを大変に楽しみにして参りました。限られた時間ではございますけれども、いろいろとご啓発いただくようにお願い申し上げまして、挨拶といたします。

【発言者１】　こんにちは。はじめまして。発言者１といいます。自分も青年農業士をやっておりまして、知事が農業関係の話をそちらでもされていたので、農業に関しても詳しい方だという印象がありました。

私の会社は、「赤ずきんちゃんのおもしろ農園」という観光農園がメインの仕事になります。平成元年に父親が病気にかかり、それまで葉タバコが中心の栽培農家だったんですが、体を十分に使って農業ができなくなったため、方向転換して観光農園になりました。その農園を自分が引き継いだわけなんですが、現在、冬から春にかけてイチゴ摘みをやっていますけれど、夏場になるとメロン、スイカ、それとこれからの秋にはさつ

まいもが出てきます。年中何かしら、果物や野菜の収穫体験ができるものということで、イチゴだけではなく、他の作物も取り入れながらやっているということになります。

パンフレットに、日本最大級というふうに表題が書いてありますが、イチゴの面積でいうと約２ヘクタールです。大体日本のイチゴ農家さんの平均が30アールを切るくらいなので、普通の農家さんの７倍、８倍です。従業員もそれなりに、正社員、それからパートさん、週末の学生アルバイトもいます。ベトナムからの海外実習生も、今、６人います。農業関係というのは慢性的に人手不足というのがありまして、それが特にこのひと月、ふた月、コロナが流行りだして、皆さんの働き方が変わったり、生活も観光圏も変わったと思いますが、１ヶ月くらい前に、うちにも久しぶりに問合せがありまして、２人の採用を決めさせてもらったところです。

農業では、ひとりで最初から最後まで作物を作れて一人前だと言います。なかなかそこまで行くのは大変なんですが、皆さん、志を持って求人に応募をしてくださるので、これから来る方々に楽しんでもらおうと思ったりします。

もうひとつ、ベトナムに去年、会社を設立しました。生産の候補地を絞るところまで行ったんですが、コロナになってしまって、その先の家屋を建てるところにまだ着手できていないんですが。自分のやりたいことしか私はできませんので、日本の素晴らしいイチゴをベトナムでも作って、日本と同じように観光農園として、ハウスの中に入って、自分の手でイチゴを取って食べてもらう。そしてその味に感動してもらいたい。その先は、イチゴだけじゃなくて、日本の農業の技術力の高さであるとか、日本の農業の生産物の素晴らしさ、そういうものまでＰＲできるような農園になるようにしていきたいなと思います。まだ稼動してはいないのですが、そういう思いを込めて作りました。日本で実習をした子たちが、ベトナムに帰った時に活躍していただいて、一緒にベトナムの農業を盛り上げていこうかなと思って作ったんです。

イチゴ狩りをイチゴ摘みと呼んでみたり、農業というのをいかにお客様に伝え、楽しんでもらうかということを、父親も大切にしてきたものですから、これからも大切にしていきたいと思っております。簡単ですが、こんなところで。ありがとうございます。

【川勝知事】　あなたのような素晴らしい後継者がいたことは、お父様にとって最高だったんじゃないかと思いますし、あなたも素晴らしい親孝行だと思います。そして成功されていることは嬉しいですね。イチゴ、それからスイカやメロン、さらにさつまい

もと、春夏秋冬それぞれ出来る物を作っていくと。

しかしながら、イチゴだけで２ヘクタールというのは大変な規模ですね、確かにひとりじゃ難しいなというのは素人でも分かります。そこで人を雇わなくちゃいけないと、ベトナムに目をつけられたのはいいですね。今、コロナで、あちこちの国際ニュースなどが報道されています。例えばベトナムですと、毎日、ＮＨＫのニュースが入る。ベトナムは、ＣＯＶＩＤ-19、コロナ感染が見事に抑えられているんですよ。人々の礼儀の正しさと、それと、みんなが良くなるようにという国民なので、すごく期待したいですね。

それから日本の農業に対する誇りを感じることができました。それは当然のことだと思います。例えば、同じイチゴと言っても品質が全然違うんですよね。どこでもできるように思いますけれども、これは単なるイチゴではなくて、ほとんど芸術品なんですね。ですから、感動があります。感動があるのは芸術だと思いますけれども、農業芸術品だと思いますね。農芸品だと思います。メロンだってもともとはエジプトかどこかが原産地だそうですけれども、イギリスで栽培されて、それが日本に入ってきて、そして改良に改良を重ねて、このごろはクラウンメロンとかアローマメロンとか言われるような最高級の品質が出来ています。お茶もそうですけれども、同じお茶にしても菊川とはちょっと違うとか、深蒸しは深蒸しの掛川的特徴があるということで、その土地にあった作物を作っています。これは一朝一夕にできるものではなくて、長年、お父様や、さらに先代の蓄積の賜物じゃないかと思いますね。

第１次産業は、第２次産業や第３次産業と比べ、遅れている産業だとなんとなく思っている人がいますけれども、これは完全に間違っています。第１次産業なしにして人は生きていけません。農林水産、これを抜きにして生きていけないわけですね。今、都会の人たちは、こういうものに憧れていると思います。コンクリートの中で生活している人にとっては、これはもう天国です。食べるものに困らないということは何より安心感につながっております。そういう日本の農業を世界の農業と比べて見ますと、おそらく芸術のレベルですから。格段に高い。つまり、憧れられるようなものを、作ってるんだと思いますね。ですから、こちらでベトナムの人たちに学んでいただいて、それを持って帰っていただいて、十分に彼らは学ぶものがあると思います。

今はコロナのために行き来が出来ませんけれども、今こそ逆に農業が注目されているんじゃないかと思います。食べ物がそこにあるということの大切さですね。戦時中には

田舎に疎開することがありましたけれども、今は都会のお金持ちの方たちが、別荘に行ってきれいな空気や食べ物があって、体が動かせて、そういう所の方がいいと思っているんじゃないでしょうか。もし仕事もオンラインやリモートでできるなら、そちらの方がいいというように、大きく価値観が転換していくと思います。その先頭に立てる地域が、静岡県であり、また掛川であると思います。

いいお話を聞きました。国際的な展開をされていて、相手も素晴らしい国民性を持った国なので、今後、確実に実を結ぶであろうという感想を持ちました。ありがとうございました。

【発言者２】　こんにちは。はじめまして。ＮＰＯ法人の発言者２と申します。このＮＰＯ法人のことをご存知じゃない方もたくさんいらっしゃると思うので、ちょっと紹介をさせていただきます。このＮＰＯ法人は、2007年に父が設立しました。掛川に西郷地区という地区がありますが、その地区を中心に、地域の皆様からいらなくなった紙、ダンボール、新聞紙などを集めて、その古紙を売ったお金で地域に何かを還元していくという環境活動を行っています。最初は太陽光発電機を、西郷小学校と、西郷未来館という地域のコミュニティーセンターにつけまして、その後、西郷地区の街灯をＬＥＤに換えるという活動を継続して行っています。

このＮＰＯ法人というのが地域に馴染んできたところで、いろいろな事業者さんからもご協力をいただくことができるようになり、市内の７つの事業者さんと一緒に、あすなろ応援団というものを立ち上げました。あすなろ応援団は、掛川市内の小・中学校にＩＣＴ支援として電子黒板やタブレットを寄贈させていただくという活動もしています。現時点で、６つの小中学校に、それぞれ電子黒板やタブレットなどを寄贈させていただいています。もともとの始まりが西郷地区での活動なので、西郷小学校では緑のエコカーテンを児童と一緒に作る活動や、今年はできなかったんですが、夏休みには環境のエコツアーというのを企画し、みんなで環境について学習するようなツアーも行っています。

東日本大震災が起きた後、2012年からは災害支援で現地支援活動にも参加するようになりました。そこから、いろいろな所で起きた災害に対し、現地に行ったり、行けない時は、自分たちの住む掛川で何ができるのかということを考え、タオルを募集して支援物資を現地に届けたりする活動をしてきました。

昨年の12月にはボランティア部を立ち上げました。私たちが活動をする中で関わっていく皆さんから、ここに人手が足りないとか、やってほしいことの要望がある一方、何かやりたいんだけど、情報がないから何もできないという声も聞こえました。そのため、人手が欲しい人と、何かやりたい人を結びつける役目として、ボランティア部を立ち上げました。

ボランティアというと、災害時に重たいものを運ぶなど、男の人じゃないと難しいと思ったり、固く考えすぎてしまう方もいると思いますが、私たちの考えるボランティアはそうではなく、そこに落ちているごみを拾っただけでも環境に優しいことをしていて、それは誰かのためのボランティアだということです。小さなことでも誰かの手助けになるということでボランティア部としています。自分ができる仕事や、自分がやりたいことを中心に、誰かのためになるものを、固く考えすぎず、若い人たちも一緒に活動してもらえればなと思ってやっています。

ボランティア部で中学生などが活動しているのを見ていて、困っている人を見つけ、自分から手を差し伸べてあげられる人たちが周りにいっぱいいれば、もっともっと掛川が良くなるのかなと思います。横のつながりも縦のつながりも、もっともっと広がっていくのかなと思っています。

今、私自身はまだ20代で、サポートメンバーの方はもちろんいらっしゃるんですけれども、私以外に学生のメンバーがいないので、ＮＰＯ法人の課題として、これから一緒に盛り上げていける若い世代を仲間に引き込みたいなと思ってるところです。以上です。

【川勝知事】　発言者２さんもお父様を引き継がれたというお話ですね。父と子の関係が素晴らしいと思います。これは本来当たり前のように思いますけれども、そうでない場合もありますから。ですから、これは本当に聞いていて気持ちのいい話ですね。縦のつながりというか、そこがベースになっていることがすごくいいですね。

それから物を無駄にしてはいけない、もったいないという、古紙回収というのは、そこから始まったんじゃないかと思います。ですから必ずリサイクルしたり、リユースしたりする。それは資源として対価があります。その対価の使い方に文化が表れると思うわけです。このＮＰＯ法人は、人を助けてワクワクするというところから来ていると思います。人が喜ぶと、心がワクワクしますよね。ですから人助けというか、社会のためになる形に使うというのは、本当にいいお金の使い方だと思います。

1995年１月17日に阪神淡路大震災というのがあり、多くの方が亡くなられました。その時にいろんな人たちが助けに行きました。他の国で大災害があった時、お店の略奪とか、いろいろと秩序が乱れることがあったんですが、日本では、困っている人に乗じて儲けようとか、盗みとかが、ほとんどなかったということで、人を助けるという意味のボランティアという言葉が、外国で使われ始めました。日本人がやっていることを、彼らが表現したわけですね。人が困ってるときには助けるというのは昔からあったに違いありません。ですから、ごみを拾うとか、街を汚しているものを片付けて、気持ちよくするのと、本当に困っている人を助けようというのとは、相通じるところがあり、同じだと思いますね。

50代はあなたからすると年寄りかもしれませんけれども、年寄りと思わないほうがいいです。年を取るのは必ずしも衰えていくことではなくて、精進されている方は、体は衰えていくかもしれませんが、総合的な判断力だとか、経験による知恵というのがあります。また、若い人は経験が不足だから劣っていると思ったら間違いです。若くても非常に優れた青年、あるいは少年少女がいます。ですから年齢に関わりないですね。優れた人はいるわけですよ。老若男女、老壮青揃っているほうがいいですが、あまり無理することはなかろうと思います。そして必ず、弟とか妹にあたるような、小さな弟、小さい妹が出てくるに違いないし、逆に、20代と50代の真ん中ぐらいで、自分の力も貸してみたいという人も出てくるに違いないです。いいことをやっていると、必ず人は見ていますからね。ですから、自信を持ってやっていくということです。

それから、ボランティア部を作って、困っている人と助けたい人をつないでいくと。つなぐ仕事ほど大切なものはないと思います。媒介になってつないでいくことによって、社会が上手く機能していくと思うんですよ。ですから、まずはボランティア部が成り立たなくちゃいけないし、かつ、ある程度の経済的な循環もできなきゃいけないので、対価をいただきながら、利益を目的にするのではなく、結果的に人のためにやっていけば自分のためにも返ってくると信じて、仕事を回し仲間を増やすことが、掛川なら可能なんじゃないかと、大変頼もしく思った次第でございます。

ありがとうございました。

【発言者３】　はじめまして。発言者３と申します。僕自身は掛川の出身で、高校までこちらで過ごしました。大学から県外に出まして、就職も全国転勤のある会社にした

ので、全国転々としながら過ごしておりました。３年前に初めて単身赴任というのを経験し、その時にすごく違和感を感じたんですね。この働き方を続けていくのが幸せなのだろうか、という疑問がすごく大きくなっていって、結果的に退職という決断をしました。ただその時、僕も35歳となっていまして、子どもも３人いましたし、ある種責任のあるポジションのなかで、違和感があるから辞めるという、ちょっとふわっとした動機で会社を辞めるのはなかなか悩ましいというか、難しいところだったんですけれども、妻に電話をかけて、田舎のほうで子育てしたいんだけど会社辞めようかなと言ったら、妻が「すごい、楽しそう。辞めちゃえ辞めちゃえ」と。ちょっと想像してなかったので、むしろ、もうちょっと冷静になろうって、僕が止めるっていう感じですね。僕も強くやりたいことがあって会社を辞めようということではなかったので、相談ができなかったんですね。多分反対されるだろうというのは分かっていたので。妻だけには事実を伝えて、単身赴任して２か月後の退職とさせていただきました。

次の転職先も一切決めずに会社を辞めまして、僕たちがどういった人生をこれから歩んでいったらいいのか、どういう暮らし方をしたいんだろうっていうところを、もう一度考えてみて、その中で出てきたのが、やはり家族との時間をしっかりと取れるような働き方がひとつと、もう一つが半農半Ｘっていうライフスタイル、それに近づきたいなと思っていたんですね。東日本大震災の際、僕は東京にいて、その時に感じたのが、僕たちはすごく脆いインフラの上で今まで暮らしていたんだなということでした。確かにお金があればスーパーでいろいろ物を買えたりするんですけれども、そもそもインフラが止まってしまったら、それは全くあてにできない状況の中で、本当に生きていくのに必要なものが自分たちで何一つ作れていないんじゃないかというところを深く考えました。その時にたまたま手にしたのが半農半Ｘという塩見直紀さんという方が書いた本で、半分の農と半分のＸ、自分たちの食べるものは自分たちで作って、残りの、生活していくのに必要な収入は、別の好きなことをやって生きていきましょうというライフスタイルです。それがすごく僕としては、バランスのいい生き方だなと感じ、せっかく会社も辞めたので、その生き方に近づく働き方ができないかと、掛川市の地元に畑つきの古民家を購入し、そこにＵターンしてきたということです。それが３年前ですね。

それで、Ｘの部分ですよね。手に職もなかったので、場所に縛られない働き方ってなんだろうと考えた結果、オンラインでできる仕事を探して、Ｗｅｂライターからスタートしました。いわゆるＷｅｂコンテンツ、文章を書いて納品する、そういったお仕事で

すね。ここで３年くらい続けてやってきております。最初は本当にちっちゃなお仕事しかなかったんですけれども、少しずついろいろいただけるようになりまして、今は、取材とかインタビューの記事を書かせていただいたり、他のライターさんが書いた記事を編集する形で関わらせていただいたりしています。さらにコンテンツを届けるというのはやっぱり大事で、届けるためには書くだけじゃなくて、ＳＮＳを使って届けようとか、広告を打って届けようとか、そういった仕事も付随していただけるようになってきて、Ｘの中身が増えてきているという状況です。

ひとつ大きな転機として、去年、ゲストハウスを開業したことがございます。築140年の古民家を改装しまして、貸切型のゲストハウスとして事業を始めました。それもＸのひとつとなっているので、あまりビジネスという感じではなくて、むしろ自分たちのライフスタイルの中の一つにゲストハウスがあって、来てくれたお客様といろいろ話を楽しんだり、食事をしたりして、そこでの関係性自体が自分たちの幸せにもつながるというような、そういう位置付けでの事業となっております。そういう形でＸを増やしていく中で、今、僕が注力している取組が、「新しい働き方ラボ」という事業です。これはクラウドソーシングの会社が行っている事業なんですけれども、クラウドソーシングというのは、オンラインでお仕事をやってほしい方とお仕事したい方をマッチングするプラットフォームとなります。僕自身も最初にライターの仕事を得たのは、クラウドソーシングの会社です。ソーシングを通じて働き方を自由にしていく、生き方を変えていくことを実践している会社で、その会社の方と知り合い、キャンパスを全国に作っていると聞き、静岡のキャンパスをやりたいと言って、昨年、掛川に初めてキャンパスを作らせていただきました。

リアルな場を通じて、新しい働き方について学んだり気づいたりする機会を作ろうというのが、「新しい働き方ラボ」の事業の取組となっております。これを通じて、僕自身も今まで会社勤めしか考えてなかったんですけれど、実際には本当にいろんな仕事があるし、人によっていろんな働き方があることに気付かされました。今、会社員から、フリーランス的な、個人で働くみたいなのがすごく流行ってきていますが、例えばプロジェクトを組んで人が集まって仕事をし、終わったらまた、それぞれの仕事に戻っていくみたいな働き方がこれから主流になっていくんじゃないかなと考えております。

今年４月に、静岡在住のフリーランスを集めたチームを立ち上げました。静岡県内に住んでいるフリーランス、ライターさんであったり、イラストレーターさん、プログラ

マーさんとか、フォトグラファーさんといった方に入っていただいて、みんなで仕事を取って、みんなで仕事を回していくといった取組をスタートさせています。その取組も、自分が悩んだ働き方を、もっと自由にしたい、可能性を広げたいというところから取り組んでいるもので、ゆくゆくは、それが子どもたちにとって一番いい環境になっていくんじゃないかなと思っています。子どもたちって、身の回りにあるものしか選択肢として選べないと思うんですよね。親がサラリーマンだったら、なんとなくサラリーマンってなっちゃいますし、そうじゃなくて、身のまわりにいろんな働き方をしている人たちがいることが大事だと思うので、こんな働き方もできるんだっていうのを肌で感じることが、子どもたちにとってもいいんじゃないかなと思っています。まずは、今、子育てをしている大人たちが、本当に楽しく働いて、楽しく暮らす、そういった街にしていきたいなと考えているので、僕がＮＰＯを通じて空き家対策に関わっているのも、まちづくりというところと、施設を作ってそこで新たな働き方を学ぶ、合宿ができる場所ができるといいなと考えています。そういった場づくりを通じて、働き方をもっとアップデートして、まずは掛川、そして静岡に、どんどん新しい働き方を広げていきたいと考えております。以上です。ありがとうございます。

【川勝知事】　感心しました。半農半Ｘですね。ここにお名刺をいただいておりますけれども、ペンと鍬（くわ）です。鍬（くわ）が半農を表し、ペンがライターをベースにしたさまざまな試みになっているということですね。こういう考え方は素晴らしいと感じました。

それからなんといっても35歳で決心したというのがいいなと思います。健康寿命というのがありまして、これは歳をいっても日常生活に支障を来さない年齢のことです。あともう一つ平均寿命というのがあるんですけれども、実は平均寿命は、寝たきりの方も含むんですね。そうでなくて、それなりの日常生活を営める人たちが、どれくらいいるかというと、世界で１位が日本なんですよ。それで、その中でもトップクラスが静岡県民です。大体70代の後半ですね。そこまでは健康寿命なんです。ですからちょうどそれよりも半分以下なんですね、35歳というのは。通常は、大学などに行って、あるいは高校を卒業して就職して一人前みたいになるじゃないですか。しかし、まだ実は人生の半分もいっていないんです。15にして学に志し、30にして立つ、40惑わず、50天命を知る、60耳従うとかね、70己の欲する所に従いて矩（のり）を踰（こ）えず。30にして立つと言ってるわけで

す。

30代のうちに決める時に、お父様や先輩ではなくて、人生のパートナーに相談して決めたというのがいいじゃないですか。一生連れ添うわけですから。その方に相談して、いいわ面白いじゃないと言われたのが決定ですよね。ですから２人でやっていかざるを得ません。しかもお子さんが３人もいらっしゃるということですから、何としてでも子どもが困らないようにしなくちゃいけないということでしょ。そのためには、まず食べるものということで、半農になりますよね。農業で自立するのは極めて難しいです。天候にも左右されるし、大きな土地を持っていないと経済的にやっていくのは難しいですよね。ですから、私は土地を借りて小作でいいと思っております。地代を払うので、土地を持っている人にとってはそれなりの収入になり、借りる方は好きなものを作り、家族が喜ぶものを作り、場合によっては友達に分けることもできて、喜ばれるわけですから、小作というのは昔は悪く言われたけれども、大地は空気と一緒です。持って死ねないわけですからね。そこを活用して、そして家族に安心感を与えるというのが半農だと思いますね。

あとの半分どうするかということで、その成功物語を聞いたかなと思います。そして、ゲストハウスとおっしゃったでしょ。これは考え方がいいと思うんですよ。すなわち、そこにいろんな人がいらっしゃり、サービスを提供すればその対価も得られるけれども、それだけじゃなく、その方たちの人生を聞くことができるので、勉強になるわけですよね。お客様も発言者３さんの意見や生き方を聞くわけだから、向こうも勉強になるでしょう。こういうやり方が、本当の生きた知識になるんじゃないかと思うわけです。

サラリーマンや、あるいは工場で働く労働者が当たり前だと思っているのはおかしいと思います。大体、日本の歴史はずっと、ここの建物が出来た明治時代は80％が農民です。工場ができても長男は家を継いでいるわけです。今は長男坊も出て行き、朝９時から午後５時くらいまで工場や会社で拘束されています。これは大正期になってからです。昔はお父さんやお母さんの背中を見ながら、おじさん、おばさんの仕事を見ながら、子どもは自然に育っていったと思います。全部、９時から５時、大会社に入って単身赴任させられ、あちこちたらい回しにされるのは異常だと思います。この異常さを早く乗り越えるための、今、過渡期にあるんじゃないかと思います。これがオンラインだとか、ウェブだとか、リモートだとか、ＩＣＴを使ってできるんじゃないかと。

どういうふうに生きられるかということをみんな模索する時代になっているんじゃ

ないですか。だから今、あなたは、いろいろと多角的になさっておられますが、おそらく面白くてしょうがないんじゃないかと思います。上手くいっている時は、好事魔多しといいますから油断されないように。ともかく子どもたちが自立するまでは、歯を食いしばって頑張らないといけないと思いますし、また、自分で作ったものをゲストハウスで料理して出すことがあると思いますが、これは誇りですよね。作ったものですから安心して食べていただけますしね。

子どもたちが高校に行って、大学に行く時に、農業に親しむということは、あまり多くないんです。特に日本の大半が住んでいる首都圏ではほとんどないに等しい。だから山村留学を学校の先生がせざるを得ない状況になってるでしょ。ですからもう少し、大地に親しむということを、教育の一環の中に入れることが望ましい。

また空き家は６件に１件くらいですよ。日本全体で。だからいくらでも使えるんですよ。別に買わなくてもいいし、場合によっては買ってもいい。静岡県は山があり、里があり、そして掛川のように海もありますよね。こういう日本の縮図みたいなところは選択肢が多い。そこでどういうふうに生きていくかというと、ひとりひとりの顔が違うように、生き方が違うのが、むしろ当たり前で、みんな一緒にゴールしましょうということではないと思いますね。幸せをどう追求するかというところが、今回のご決断の基礎になったみたいで、その決断がいいですね。家族の幸せ、自分の幸せ、それから郷里への想いとかね。郷里には、ご親戚やご両親がいらっしゃいますから。戻ってくれば安心ですよね、ご家族も。

私は大体30歳前後にそういう転機が来ると思って、「30歳になったら静岡県」というのをキャッチフレーズにしてやっているんです。昔は終の棲家が静岡県と言われていたのが、今、違ってきています。情報提供しているからですよ、いろいろと。ＱＲコードで、静岡県のことが分かるとかね、やっているんですよ。「30歳になったら静岡県」の典型的なモデルが発言者３さんじゃないかなと思ったりしてうれしくなりました。

【発言者４】　大日本報徳社の発言者４と申します。今日は報徳社の大講堂をご利用いただきましてありがとうございます。

私は昨年児童書の出版社であるポプラ社の主催する児童文学新人賞の大賞を受賞しまして、受賞作が10月５日に書店に並ぶこととなっています。受賞の連絡を受けたのが昨年の10月ですので、ちょうど１年になるんですけれども、受賞が決まった後も担当の

編集者の方と４回ほど原稿をやりとりしまして、ようやく刊行ということになりました。

この本は、裁縫をする男の子が出会った女の子の、お母さんから譲られた大切なワンピースをお直しするのを頼まれたというお話なんですけれども、自分の中では、もともとテーマがあったのではなくて、書いているうちに普段考えていることが出てくるのかなとちょっと思いました。

先ほど、掛川の佇まいとおっしゃっていただいたんですけれども、どこをというふうには書いてありませんけれども、私が生まれ育ったこの掛川の地で子どもたちが走り回るような、そんなイメージの中で書きました。

先ほど知事が、50代は年寄りじゃないとおっしゃっていただいたのがとても心強いんですけれども、とはいえ、新人賞とはいっても、まったく新人らしからぬ年齢での受賞になりました。確かに人生100年となれば、まだ半分ということで、頑張っていけたらなと思っています。数えてみましたら、物語を書きたい、書く人になりたいと志してから、もう28年も経っているんですね。何度も文学賞に応募し続けてはボツになって、よく自分でもあきらめずに書いてきたなと思うんですけれども、私のそばにはいつも本がありましたし、児童文学も好きだったというのが、あきらめないしぶとさみたいなものを作ったんだと思っています。児童文学というのは子どもに向けて書かれたものなんですけれども、決して甘いだけの物語ではないと思っています。それでもこれからの未来を生きる子どもたちに向かって書くものですので、世界っていうのは、美しいし広いし不思議なもので満ちていることを伝えなきゃいけないし、人生は生きるに値することを伝えなきゃいけないし、夢やあこがれを持つことの大切さも伝えるものだと思っています。

そんな物語を私はずっと、子どもの頃から大人になっても読んでまいりましたので、自分でもなんとかなるさと楽天的な性格に育って、長く夢を持ち続けられたのかなと考えています。

普段はこの報徳社で、月刊誌の編集をしております。今月号の特集は、映画「東京裁判」を考えるということで、映画の監督補佐をされた方が、小田原の報徳博物館の館長をされている方で、そんなご縁でインタビューをさせていただきました。先ほど、発言者１さんの知事のコメントで、知事が農業に注目されているとおっしゃっていましたけれども、10月は農業の特集を組んでいます。やはり、報徳の原点というのは農業でありますし、私も物語を書きながら、ゼロから１に作り出すときが一番大変だというのはす

ごく実感していますので、見えるものも見えない創作も、やはり作り出すのは、すごい力があるのかなと思います。

いろんな方のお話を聞く中で、視野を広げたり、書く訓練にもなって、本当に職場で勉強させてもらっているところもありますので、非常にありがたい職場ですし、普段の小説は朝方だとか、休日に書いているんですけれども、先ほどの半農半Ｘじゃありませんけれども、やっていけたらなと思っております。

皆さん、夢が叶ってよかったねって、よく言っていただくんですけれども、作家というのはやっぱり書き続けないといけないし、本が出続けなくては作家とは言えないと思っていますので、今は、気を引き締めながら夢の入り口に立ったんだという気持ちでやっていこうかなと思ってます。

小さい頃から身近にたくさん本があって、たくさんの本に助けられてきたなと思っています。こういうふうに自分が、皆さんに本のことをお話しする機会がもしかしたら増えてくるかもしれないので、少しでも、今まで助けてもらった本とか、そういったものに恩返しができたらなと思います。ただ、児童文学は絵本と違って、親が読んで子どもに勧めるというのが、すっと出来ないんですね。私も３年ほど静岡市の図書室の先生をしたことがありまして、絵本から文が少し長くなっている物語にステップすることが非常に難しいと考えています。ですので、児童文学みたいなものも少し注目していただけたらありがたいなと思います。

あと、せっかくなので知事に伺いたいと思っているんですけれども、国語の教科書の学習指導要領が変わって、論理国語と文学国語の選択性になることを知りまして、大学入試なんかでは契約書を読むことが勉強になるような、そういったものが選択されるようになるんじゃないかと。すると、高校生で文学を１作も読まない子がて出てきちゃうんじゃないかと思われていますけれども、私も本に助けられて、本の力ってすごいと感じているので、そのあたりどのように知事がお考えなのかなっていうのを伺いたいのと、あともう一つ、子どもたちに本の面白さとか、どんなふうに知事だったらお伝えするのかなというのも、できれば伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【川勝知事】　ともかく発言者４さん、おめでとうございました。苦節28年にして栄冠に輝く、しかも大賞ということで、表紙を見せていただきましたけれども、いい表紙ですね。「ライラックのワンピース」ですか。ポプラ社は児童文学に定評のあるところ

ですから、売れる本を当然探していたと思います。その大賞になったことは、ご両親も喜ばれていると思いますね。しかも掛川のご出身の方で、ずっとあきらめないでやってこられたということですから、誰にとってもうれしい、わくわくするような話、ときめくような話ですよね。頑張りましたね。10年一節と言いますからね。28年頑張ったというのは本当に偉いと思います。

最後は全部は文学、と言ったらおかしいですけれども、科学も技術も、最後は芸術に向かうんじゃないかと思いますね。感動という、人の心から人の心へというのは、正しいことが書かれていることと別ですね。本当に人の心に訴えるかどうか。心を形に文字にする、言霊(ことだま)が入ると。言霊(ことだま)というのも昔の言葉ですけれども、日本は言霊(ことだま)の幸(さき)わう国って言うじゃないですか。長く文字のない時代が日本にもありました。やがて文字が出てきて文字に言霊(ことだま)を入れるようになりましたが、それを抜きにすると形式だけになって、契約書のようにドライな感じになって何の感動もなくなるんじゃないかと思います。一回そういう方向に振り子が振れるのはしょうがないにしても、そんなもの長続きするはずがないと私は思っています。

大切なのは心が伝わることですから、自分の心を養ったものを子どもに伝えるには、自分が感動したものを、学校の先生なら自分が生きてきたものを、課題読書として１か月に１回でも、２か月に１回でも書かせて、発表させて、こんな読み方があるんだと、みんながお互いに感心し合うということを、ある程度は強制しなきゃいけない。教え育むというのが教育ですから。本を読んでなければそれはできません。ですから、いい本をきっかけに、本を読む習慣がつくようにしていかないと、読書の習慣が廃れていくんじゃないかと心配しています。ＳＮＳだとか、そういうところで情報は手に入りますけどね。ほんとに潤いがあるのかどうかと。ずっと一生残る、その感動はもう忘れないですね。

本を読んで、それをずっと覚えている。ある人にとっては映画かもしれない。ある人にとっては音楽かもしれません。絵画かもしれない。人の心にずっと残っていくものがたくさんあると、すごい財産だと思うんですよ。自分の中にある心の財産は、分けても減らないんですよ。分かち合っていくことが大切で、そのために財産をたくさん持っていないといけない。先生たる者は、子どもの心に届くように、一律ではなくいろんな文学を教えてもらいたいと思いますね。

改めまして、おめでとうございました。楽しみにして拝読したいと思います。ありが

とうございました。

【川勝知事】　今日は発言者１さん、そしてまだ20代の理事長さん、それから、半農半Ｘのお話、それから児童文学の話をお聞きしました。それぞれ全然違うお話で、興奮というか、感動がありました。やっぱり生き方というのがきれいなんじゃないですか。きれいとか汚いっていうのは、測れないですよね。だけどありますよね。そういうきれいな生き方というか、いいなと思わせる生き方をされている方が、今日ここに４人いらしたと思います。

それから、愛情に溢れる話が多かったですね。愛情というのは測れないですよね。測れませんが、じゃあ、ないかというと、あると思うんです。愛情だとか、美しさだとかいうものは、測れませんけれども、存在していると思います。

そして掛川というところは、報徳社もそうですし、掛川西高校の元になった学校もそうですし、信用金庫もここからですし、それからお城も、全部市民の力でしょ。新幹線の駅もそうですし、東海道の駅舎だって、残すには金がかかるとなると、みんなお金を出されたじゃないですか。素晴らしい所です。これは、そこに生きている人を通して受け継がれているんじゃないかと思います。

今日、素晴らしいお話を４人の方々から承りまして、本当にありがとうございました。お礼申し上げます。